テンプレならテンプレらしくいけばいいのに、なぜこうなる

さんすべりあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
テンプレならテンプレらしくいけばいいのに、なぜこうなる

【Ｎコード】
Ｎ４０８４Ｙ

【作者名】
さんすべりあ

【あらすじ】
あたしと、幼馴染の筋肉バカはオンラインゲームの世界にいた。たぶん。しかし高レベル剣士のあたしはいいとして、この筋肉バカはハーフエルフの剣士なんていう無茶なキャラを作ったばかり。レベル１、紙より薄い防御力の相方とどう生き抜けっていうの？

8月24日　プロローグ

コウキがシャーペンをくるくる回している。あたしには出来ない芸当だ。回そうとした瞬間にとんで行くので、うっかりすると人に当たってプチ凶器になる。

くるくる。
くるくる。

シャーペンは回り続ける。問題が解かれる気配はない。

「飽きた。飽きた飽きた飽きた」
コウキはとうとうひっくり返った。バンザイの形に両手を上げつつだったので、横置きにしてあるカラーボックスに手をぶつける。
バカである。あたしの部屋は、殺風景なあんたのと違って物が多いんだから、少しは考えろ。

「いってえ」
「きっと天罰ね。寝てないで問題解けって、神様が言ってんのよ」
「違えーよ。鬼トモにしごかれるカワイソーなオレに、休憩しろって言ってんだ」

コウキは腹ばいに転がり、カラーボックスに片づけられていたパソコンの電源を入れる。
あたしは即座に消しゴムを投げつけた。
「なにやってんのよ。あたしが貴重な時間を割いてやってるんだから、さっさと宿題終わらせて」

夏休み最終週である。
にもかかわらず、この脳ミソ筋肉男は何もしていない。後から苦労すると分かっていてやらないのは、実はこいつマゾじゃなかろうか。

「トモがやってくれよー」
あたしは今度はマーカーペンを投げた。が、勝手にオンラインゲームを始めた彼には、反省の色も勉強に戻る気配もない。

「高一のあたしに三年のあんたの宿題やらせないで。そもそも、受験生がこの状況ってあり得ない！」
「あれ、親から聞いてない？　オレスポーツ推薦決まったから。受験ナシ」

コウキは有名私立大の名前を上げた。こっちは今から頑張ってるというのに、腹の立つ男である。ムカついたので、次々に文具を投げつけてやる。

息切れするまでやったのだが、筋肉バカの筋肉にはばまれた。
ＨＰぜんぜん削れてない。逆にあたしのが減ってる気がする。ほんとムカつく。

あたしは立ち上がると、寝そべったままキャラクター設定をしている男の背中に座ってやった。
「重い。ついでにセクハラ」
はっはっは。動揺している。乗ってるのが女だと思ってない幼馴染でも、多少は効くんだな。一矢報いた気になって、楽しい。
「耳、赤くなってる」

肉のない、ボンキュッボーンな体型から真逆のあたしだからできる芸当だ。色気とか雰囲気とか備わったら、さすがにここまではしない。自衛する。

「うるさい。降りろっての」

赤くなったまま設定を終え、コウキは一生懸命ゲームに集中しようとしている。

「だったら宿題するって言って。あんたのママに頼まれてんの。報酬（めあわせ）は前払いで、もう食べちゃったの……って、似合わないキャラ作ったわね」

あたしはぷぷっと噴いた。

画面にいるのは、金髪美形で背の高いハーフエルフの剣士だ。身長こそ標準だが、ドワーフなみに筋肉ダルマなコウキとは正反対。

人は自分にないものに憧れるっていうけど、まさにソレ。分かりやすい。

「いいだろ」

「よくない。人種と職業が果てしなくミスマッチ。伸びないどころか、すぐ死ぬ」

「いいんだって。トモが宿題終わらせてくれるまでの暇つぶしだし」

「だから自分でやってってば」

「分かんねーもん」

言い合っている間に、ハーフエルフは死んだ。早っ。

コウキがこりずに同じキャラクターでプレイしようとしているので、あたしは回線を引っこ抜こうとした。

その瞬間、視界が真っ黒になった。

8月24日　プロローグ（後書き）

――――もう片方が文章硬いんで、やわらかめのも書いていみようかと思いました。更新はきっと遅いです。

8月24日　1（前書き）

カメな更新ですみません。
とりあえず、今日から三日間は更新します。

8月24日　1

むきだしの天井に、白くほこりがついている。
シーツはざらざらチクチクだ。
横を向けば、大雑把（おおざっぱ）に作られたサイドテーブル。縁にやすりがかけられていないので、うっかり触ると木の破片が手に刺さりそうだ。

明らかに自分の部屋ではない。
あたしは唸（うな）った。
「……」
とりあえず起き、自分の顔や腕を触てみる。現実っぽい感触。床をだんっと蹴ってみる。
下の階からは、怒鳴り声がかえって来た。

落ちつこう。
まずは基本項目の確認だ。
名前、煙月斎（えんげつさい）。性別、男。年齢、６０歳。職業、剣士。レベル、４０１。
ついでに現実のあたしは、関口友である。１６歳、女子高生。

現在地は『スグロ』の宿らしい。見覚えがある……って言っていいのかな。オンラインゲームの街だ。前回ここでクエストをこなして終わった。

記憶に問題はないけど、うん、いろいろ困ったな。
って、すがすがしく笑うのもどうなんだ自分。落ちついているつもりでも、実はパニック状態なのか。

『スグロ』は幸いにして、初心者の拠点の街『キョウ』から近い。

あたしは身支度を整えると、宿を出た。

＊

足の速さは、関口友以上、煙月斎以下だった。
体力や技もそうだ。どうせなら、キャラそのものにしてくれればいいのに。
おかげで、モンスターに出会った時死ぬかと思ったよ！
いつもなら一撃なのに、レベル１の雑魚敵やっつけるのに十分はかかった。
生きてるだけで偉いよ自分！
いや、学校とかいじめ１１０番のお題目じゃないけど、ホントに。

そんなこんなで、『キョウ』の拠点に着いた時にはへとへとだった。
全身汗で気持ち悪かったが、休みもせずに金髪美形の長身を探す。
中にはキャラ設定でかぶったんだろうなって人達もいたが、ハーフエルフの剣士なんておバカなのは一人だけだった。
まあ、当然だ。

しかもそのおバカさんは、他の人達が情報収集につとめているにも関わらず、真剣で素振りを行っていた。なんだその図太さ！
拠点から動いてなかったのはいいが、
「ばか――――っ！」
あたしは跳び蹴りをかました。

完璧インドア派の関口友と違って、ちゃんと跳べた。相手もさる者、剣の柄尻で払われたが、着地も決まった。
「こんな街のど真ん中で刃物ふりまわすんじゃないわよ！」
コウキは慌てて剣を鞘に戻し、謝罪した。

頭を上げてこちらを見る。ぼそりと呟いた。

「うっわ、おネエのじいさんがいる」

居合抜きの一撃が決まったのは言うまでもない。

「いってー」

コウキが脇腹を押さえているが、途中で刃を返して峰打ちにしたので、あざで済んでいるはずだ。レベル４０１と居合抜きスキルがあるからこそできる、見事な手加減攻撃である（自画自賛）。

「だってコウキがバカなんだもん。反省して」

「……もしかしてトモ？」

コウキはあたしのキャラクターを見たことがないので、分からなくて当然だ。

「そうよ」

「嘘だろ……。お前いきなり強くなってるぞ」

「この世界じゃまだまだよ。レベル７００とか見たことあるから。しかも慣れてないせいか、煙月斎本来の力じゃないし」

「でもオレより強い」

言うと、コウキは手近な木の枝を折って素振りを始めた。真剣は他人の迷惑になるが、これくらいなら平気だと思ったらしい。

……やっぱりこいつはスポーツバカだ。

現実世界より劣っていたから（そりゃそうだ。だってハーフエルフのレベル１だ）って、体を鍛えようとするあたり筋金入りだ。

効率は悪そうだが、本人が頑張っているので止めないでおく。

こうして頑張っているコウキを見ているのは、嫌いじゃない。子供の頃はよく試合も見に行った。隙のない横顔はいいと思う。

今の美形顔は見慣れないから、できれば本人のに変更して欲しいけど。

しばらくコウキの横でぼーっとしてから、あたしは立ち上がった。

「ギルドとか掲示板とか見て来る。コウキはここにいてね」

彼は手を止めた。

「オレも行く。お前、絶対しゃべんない方がいい」

「おネエのジジイで何が悪いのよ」

「存在自体が悪だろ。フツーに気持ち悪い」

「うるさい。あんたはここで気が済むまで素振りしてて」

8月24日　2

「うるさい。あんたはここで気が済むまで素振りしてて」
言い置いて、歩き出す。

勝手知ったる街なので、迷う心配はない。
拠点でもそうだったが、冒険者たちは普通にクエストの相談や雑談をしていた。なんで？　まだ巻き込まれたばっかりだよ？　こういう時、ラノベだとみんな右往左往してるはずなのに。

だれか情報収集に走り回ってよー。
魔法や技能を試して下さーい。

心の中で願ってもどうにもならないので、自分でやるしかなかった。
なんなんだこの不幸っぷりは。
ぎぶみーチート能力。せめて現在の情報を教えろ！

思った瞬間、脳裏にぴこんとひらめいた。

【8月24日午前11時59分】
【ログイン数108名】

……。
いや、そうじゃなくて。
もっとこう、使える情報を。

【メンテナンスのお知らせ】
30日0時から6時まで、更新の予定です。

ご不便をおかけしますが、この時間帯はアクセスができなくなります。

だからそうじゃなくて。

せめて友人と話をさせろ。

使えもしない超能力を使うかんじで念じたら、登録してある友人の情報が頭に浮かんだ。

【うさみみ：ログインしていません】

【えとー：ログインしていません】

【６６６：ログインしていません】

ふっ。あんたら、学校であったらただじゃおかない。帰りにケーキおごらせてやるからなあああっ。

心の中でしくしく泣きながら、掲示板に向かう。

何か注意書きが出ていないかと思ったのだが、ムダだった。

ゲーム開始はじめに見た使用上の注意と、クエストしか貼られていない。

しかも掲示板はリアルに壁にうちつけられた板で、クエストは紙に書かれている。

ここまで雰囲気出さなくていいよ。

いっそ電光掲示板にしてほしい。

ゲーム世界じゃなくて、異世界にトリップした気になるからさあ（半泣き）！

＊

他の人がだれも行動を起こさないので、あたしは一人でいろいろ試してみた。
初心者がやってるのと同じ行動なので、とくに注目を浴びたりしない。

いや、声をかけてくれた方がありがたいんだけどね。困った時はおたがいさまって言うし、三人寄れば文殊の知恵ってことわざもある。
みんなで考えたいです。はい。切実に。

なにはともあれ、分かった事がある。
その一、ログアウトはできない。
その二、なぜこうなったのかは分からない。

ファンタジー分類かＳＦかによってこの先の展開が違いそうだが、よくあるストーリーである。取り乱そうにも、テンプレすぎて笑ってしまう。
「はっはっは……はあああ～」
ごめん、やっぱ泣きたいわ。

気をとりなおして、分かった事その三。ここはオンラインゲームの世界観をそのまま表わしているが、それ以外は現実に近い。

たとえばショートカット機能が使えない。

敵も自分も、ＨＰ・ＭＰゲージが表示されない（代わりにいままで戦った記憶みたいなのがあって、特性や弱り具合など、なんとなく分かる。『スグロ』から移動して来た時、体験した）。

アイテム効果の範囲でなら、傷も治った。たぶん生き返りもあり

だと思う。怖いから試せないけど。

能力は、時間がたつに従ってキャラクターの値そのままになった。馴染んだんだろうけど、これに関しては、ちょっと待てと言いたい。

思考がね、関口友じゃないんだよ！

あたしは、自分で言うのもなんだけど、それなりに頭がいい方だ。コウキの親が宿題で頼ってくるくらいにはいい。

なのに今、頑張らないといろいろ考えつかない。これってどうなの！

キャラ設定のｉｎｔ値が低いと、どれだけ高学歴で社会経験を積んでいてもダメなのか。小学生プレーヤーでもキャラクターの値がＭａｘなら、それなりにひらめくのか。

……まあね、スポーツ推薦なコウキがダメ剣士になってたくらいだから、例外はないんだろうけどさ。

うらむよ神様。

世の中にはもうちょっと楽なトリップがあるよね？

ゲームの特性を一人だけ知ってて活かせたり、万能だったり。そんでウハウハ生活できるってやつがさあ。

そもそもこういう時って、どっちか片方は魔法使いじゃないの？

剣士二人だなんて、バランス悪すぎ。

8月24日　3

心の中で神様に思う存分ぐちを言い終えたあたしは、回復薬を大量に買い込んだ。
魔法使いや僧侶が仲間になってくれるまでは、これしかない。
そして、情報収集と買い物を終えて戻ったあたしは目を見張った。
「……あれ？」
コウキは言いつけ通り、黙々と素振りを続けていた。勉強はすぐ飽きるが、運動関係の集中力は常識外れだ。感心する。
それはいいのだが。

なんと！　レベル1だったコウキが、いつの間にか経験値を獲得していた。
嘘だろ。何だお前、フィールドにも出てないのに素振りだけでこれってどういう事。ナニ補正だ。

それとも、あたしのひいき目ってヤツですか？
そう思いたいから、表示が出ないのをいいことにそう感じてるだけ？

「ようやく帰って来たか」
驚きに気付かないコウキは、腕で額の汗をふいて笑いかけて来る。
……ごめん、今美形かもしれないけど、中身があんただと思うとハーフエルフのキラキラ具合が気持ち悪いよ。
「いつまでかかってんだよ。変なのにからまれてないな？」
「ぜーんぜん。それどころか、いやになるくらい普通で日常だった。

１０８人もいるのに、誰もキレてないなんて間違ってる」
「ここに一人いるじゃないか」
「あたし？　失礼な。まだキレてないっての」
あたしは四次元バッグ（正式名称忘れた）から、タオルと着替えをつかみ出して投げてやった。

「もう夕方だし、お風呂行って来て。今日着た服は洗うこと」
拠点は、個室などない代わりに、最低限のものは無償で保障されている（もしかして生活保護？）。窓口で固形食をもらい毛布を借り、雑魚寝部屋の一角に陣取れば、すぐに睡魔がおそって来た。

疲れた。
現実世界の一週間分は動いた気がする。

人の気配で目を覚ますと、コウキがすぐ傍に立っていた。
「トモも入ってくれれば？　いい湯だったぞ」
のほほんとした男から、あたしは服をひったくった。

「洗濯してって言ったじゃない」
「面倒だし、二日に一回でよくね？」
「よくないわよ！　汗臭いっ！」
周りにいる人々から（こいつ女？　それともおネエ？）という視線が向けられ、ムッとする。剣豪の老人キャラなので嫌な事にはならないが、微妙は微妙だ。

「これくらいでイライラすんなって」
気楽な笑顔でどっかりと腰を下ろすコウキには、焦りのかけらもない。
さすが柔道部主将、上の者は鷹揚にかまえるってか。
下級生はそれで安心するのかもしれないけど、あたしはあんたの

とこの部員じゃないの。ぜんぜん安心できません。

だって。

ゲーム経験者のあたしが教えなきゃ、何にも分かんないくせに。
紙装甲のくせに。
レベル1で死んじゃうかもしれないのに。

この鈍感野郎。
いっそニブニブの実を食いすぎて死んでしまえ。

「悪いけど、いっぱいいっぱいなの。イライラは大目に見といて」
あたしは文句を飲み込むと、四次元バッグとコウキの服を持って近くの宿屋へ向かった。

男風呂にも女風呂にも入れないなら、部屋を一時間借りてたらいにお湯を張るしかないでしょう。
別にあたしは男湯でもいいんだけどね。わいせつ物くらい、パパで見慣れてるし（風呂上がりにはパンツをはきましょう）。
けど、見られる側が嫌だと思う。

自分とコウキの服を洗ってから、白髪交じりの総髪にお湯をかぶる。傷だらけの体はいかにも歴戦の武士っぽい。

髪と体を洗ってたらい風呂に入れば、なんだか泣けてきた。
ばしゃんと、勢いよく顔を洗う。
頑張れあたし。煙月斎（えんげつさい）は泣かないぞ。

明日は、コウキが素振りしてる間に仲間を募集しているパーティ

をチェックしに行こう。
知らない人は怖いから避けて来たけど、もうそんな事いっていられない。
たぶん、外に行かないと生活費が稼げない。
コウキのレベル上げをはかるにも、回復魔法が使える人がいないと不安だし。

そんな事を考えながら拠点に帰ろうとしていると、ガラの悪そうな男たちがこっちへとやって来た。
ぶつからないように斜めに進路をとっても、彼らはあたしの前を塞ぐように歩いて来る。

ちなみにガラが悪そうというのは、あたしの勝手な印象だ。キャラクターはきちんとデザインされているので、現実世界なら充分イケメンだ。

「さっき騒いでたろ。トモちゃんだっけ？」
「女の子ー？　何歳？」
「ゲームなんだから、男湯来たら良かったのに。あ、恥ずかしいお年頃かあ」

分かりやすい嫌がらせである。百歩譲って、彼らもこんな状況になってストレスが溜まっていると考えてやってもいいけど、イライラはこっちも一緒。

ああ、我慢できない。
腰を落とした低い体勢から、四次元バッグから直接刀を居合抜き。
一番近くにいた男のわいせつ物にあてて、睨み上げる。
「下種（げす）が。斬り落とされたいか」

煙月斎のロープレだ。声は充分に低い。
さっきまでのソプラノヴォイスが素(す)だが、あたしは、やろうと思えばやれる子なのだ（ん？　言葉の使い方ちがう？）。

あと少し刃を上へ傾ければ、あるいは刀を抜ききれば、大参事になる。
男としては最大の悪夢。本人真っ青。
通りすがりの第三者さえガタブル震え、深くふかーく同情しつつ見守っている。

相手の闘気がマイナスになったところで、あたしは刀を退(ひ)いた。
にっこりと笑う。
「おネエでごめんねー。あたしだって広いお風呂入りたいけど、嫌がられるしぃ。でもぉ、アナタたちが呼んでくれたらいいのかしらぁ。ピチピチ男の子のハダカが見れて眼福ってヤツぅ？」

本気にしたらしい。
やつらはナメクジを飲み込んだような表情で逃げて行った。

それからというもの、あたしが拠点でお風呂セットを手にすると、伝令が走るようになった。一斉に風呂場にいた全員が上がり、半泣きで脱衣所に駆けこむ。

誰もいないならと、あたしは気がねせず拠点のお風呂を使う事にした。すごいよ、広いうえに温泉だ。ワンダフル、グレイト、アメイジーング。
噂が広まって、絡(から)まれることもなくなった。
天国である。

8月25日　1

しかし、問題もあった。

人に真剣を向けたので、拠点のまとめ役に注意された（ＮＰＣは普通に人間に見える）。

パーティ募集には断られ、フリーの魔術師も見つからず、いまや素振りマニアとなったコウキの横で頬杖をついてみる。彼は実戦を想定した動きを取り入れ、前後左右に動きを加えている。

「ハーフエルフの剣士なんてあり得ないと思ってたけど、少しは形になったね」

「まかせろ。これくらい楽勝楽勝」

防御値はあいかわらず紙だが、俊敏さがハンパない。

コウキは昨日、むだな挑発をするなと怒らなかった。

休み空間を確保するためとはいえ、あたしと別行動をとった事を反省していた。そういう男なのだ。

「……ごめんね」

「おう」

「で、考えたんだけど、コウキも逃げ足は速そうだし、あたし達だけで外行ってみようか」

とたんに、コウキが輝かんばかりの笑顔で振り返った。

うわ、キラキラがとんでもない。

「やった。実戦してみたかったんだよ。でもお前ゴーサイン出さな

いしさ。うおぉぉ、いくぜえ」

吠えている。

もしかしてスポーツバカじゃなく、格闘マニアだったのか？

＊

「じゃあ、あそこにちょうどいいのがいるから、やってみて」

街の外、初心者が一番初めにうろつく草原に出て、あたしは１レベルモンスターを指差した。

丸くてぷにぷにしているヤツである。

あたしのキャラクター煙月斎（えんげつさい）には、まったくダメージの通らない最弱の敵。

「ちっちぇー。これ、上から斬ったら剣が地面に食い込むんじゃねえ？」

「それでもいいから。あんたの剣なんて、変なの斬ったら切れ味が鈍るなんて考えなくていい初期装備」

「それもそうだな」

コウキは、農家のおじさんが畑を耕すようにざっくりやった。

この格闘マニアは、モンスターを殺すことに躊躇（ちゅうちょ）しなかった。

いっそ気持ちいいくらいの思い切りのよさで、１レベルモンスターをみじん切りにしやがった。

もう一度言うが、コウキの剣は初期装備のままだ。

ハーフエルフは力が弱いので、軽い一撃しか出せない。俊敏さだけはある。

となったら、回数で勝負するしかない。

結果、みじん切り。
血まみれスライムの出来上がりだ。
コウキが死ななかったからいいんだけど、これはこれでグロい。
「あんたどS？　どこの拷問官よ」
「剣が斬れないのが悪いんだよ。トモ金あるんだろ？　いい武器買ってくれ」
のんきに話していると、死んだと思っていたモンスターが最後の力を振り絞って跳ねた。
コウキに、ぽよんと体当たり。
軽いハーフエルフは簡単にふっとんで――――死んだ。
「ちょっとおおおおっ！」
即行で蘇生アイテムを使うと、生き返ってくれたけどね！
言っていい？
「ちゃんとトドメ刺せバカ元のあんたは筋肉ダルマであたしの体当たりだって跳ね返すかもしれないけど今は究極草食系ひょろ長生物なんだから少しは考えなさいよそりゃあたしも確認しなかったのが悪いけどこんなとこで死なないでよぉぉぉぉぉぉっ！」
絶叫すると息が切れた。
ゼエゼエ言いながら、ぼっさりと（たぶん）残りＨＰ１だったモンスターを斬り捨てる。

オーバーキルだろうが構うもんか。

「トモ」

「なによっ！」

草原に座り込んだままのコウキが手招きしている。

剣を鞘に戻して近寄れば、

「泣くなって」

頭を抱き寄せられた。

「～～～～～～あんたいつの間に近眼になったのっ！　あたしのどのへんが泣いてるんだか言ってみなさいよ！」

あたしは、蘇ったばかりの幼馴染の腹に拳を叩き込んだ。

＊

一応言っておくと、あたしは本当に泣いてない。

半泣きだったかもしれないが、人が見てわかる範囲のものではない。

「ひでー。お前、いきなり性格変わってるぞ」

手加減したので、コウキは地面に転がってはいるが、ケガはしていない。

「現実世界だと、物は投げても殴らないのに」

「リアルでできないことをやれるのが、ヴァーチャルの醍醐味（だいごみ）ってものでしょ」

草原に寝転がるハーフエルフなどという古典ファンタジーな図を見ながら、あたしはモンスターの死体をつついた。体内から石のようなものが出て来た。たぶんこれは売れる物。

「それより、目先の状況をなんとかしようよ。あのね、いい武器買ってもいいんだけど、装備可能なレベルってのがあるの」

素振りと戦闘一回でレベル2になれたかもしれないけど、つかえる剣はまだ無理だ。

「だから、あんた剣士じゃなくて魔法使いに転職しない？　それなら後方にいれるから、レベル低くても安全安心」

「いやだ。格闘こそ男のロマン、血湧き肉躍るって言葉を知らないのか。ブルース・リーは神様だ。北斗の拳は彼がモデルなんだぞ」

やっぱりダメか。

一度死んでも治らない格闘バカがここにいる。

「煙月斎だっけ。トモのも以外に趣味いいよ。塚原卜伝、宮本武蔵、千葉周作。いっそ眠狂四郎」

剣豪シリーズにしては、ずいぶんマイナーな……。

「……じゃあせめて、忍者か弓兵で手をうって欲しいんだけど」

「お。忍者もいいな。トモ、丹波大介とニザールとどっちがあり？」

「ニザールって方で」

それが誰だか知らないけど、金髪ハーフエルフに大介とか名づけるよりマシだ。

とりあえずこれで、毒のついた武器を持たせられる。

隙をついてサクッとやってもいい。
力も防御もないのに真っ向勝負、エンドレスで切り刻む必要はなくなった。
はまりすぎてドン引きできる、どS姿を見せられる事もないだろう。

ホント良かった。

8月25日　1（後書き）

ツンデレ？

8月25日　2（前書き）

読んでくださっている方、ありがとうございます。
実はすごく嬉しいです！（↑力説）

8月25日　2

コウキが無事転職を果たしたので、あたしはクエストを引き受けることにした。

＊

忍者になったコウキは、楽しそうに木々を飛び回っている。
何度も言うが、あんたの防御力は紙なんだから、そこんとこ気をつけろよ。
すでに一回死んでるのを忘れるな。

今回引き受けたクエストは、森林管理官からの依頼である。
詰め所に幽霊が出るそうだ。

ゴーストは、ほんとうは光魔法でやっつけるのが一番簡単だ。
しかし残念ながらうちには魔法使いがいないので、メイン攻撃・あたしが祝福してもらった剣をふりまわす、サブ・コウキが聖水を投げつける、という作戦でいく。

「トモ、詰め所あったぞ」
コウキが木の上で指をさした。
その先には、赤レンガの倉庫がいくつも建っている。ご丁寧に建物の前は大きな川である。
ここは北海道の観光名所か！

心の中でツッコみつつ、森を抜ける。
窓からこっちを見ていた人が、笑顔で手を振ってきた。彼女は一旦ひっこみ、玄関から走って出てくる。
「お待ちしてました。今森林官たちは枝落としに出てるんですけど、夕方になったら帰って来ますわ。どうぞ中でお待ち下さい」
かわいいＮＰＣのお出迎えに、あたしとコウキは手を取りあって喜んだ。

だって、このひと小人だよ！
ドワーフほどごつくなくて、片手にサトイモ（？）の葉をもって日傘にしている。いわゆるコロボックルってやつだ。さすが北海道、いいゆるキャラをもってるな。やるじゃないか。

閑話休題（それはさておき）、クエストの基本は情報収集である。
「幽霊って、いつ頃から出るようになったの？」
「今年の春くらいからですわ」

お茶を出してくれた小人は、テーブル横の脚立の上にちょこんと座った。彼女はここで、人間の森林官の世話をしているそうだ。
「春に新人の森林官が、倒れてきた木の下敷きになって亡くなってしまったんですの。みなさん、その彼の幽霊だとおっしゃってますわ」
「ふうん」

「夜の１２時になると出てきますの。場所は決まってなくて、倉庫のどれかに、こう、ふよふよと」
小人は胸の前に両手をたらした。

「見たの？」
「見ましたわ。幽霊さんが出はじめて何日かたった頃、みんなで確認に行きましたの。手分けして全部の倉庫に潜んで。そうしたら、がさって音がして、そっち側を見たらいましたの！」

……あれ？　今何かがひっかかったけど、何だったかな。
たぶん関口友だと分かるんだろうけど、煙月斎（えんげつさい）のｉｎｔ値が！
ｉｎｔ値がじゃまをするうぅぅぅ！

「うー」
考えても思いつかないので、諦めよう。
いざとなったら斬る。その方向で（おい！）。

「ユーレー……オレは会いたくないなあ」
「慣れれば平気ですわ。ぜんぜん怖くありませんもの。ただ、困ったことがありまして」
「何？」
「幽霊さん、出るたびにリグレ鉱石を消費してしまいますの」

なんですか、その特殊な幽霊。

リグレ鉱石は、きのこの形をしている高値で取引される鉱物だ。
決まった木の周りに、丸く円を描くように見つかるので、別名マツタケ石。
フェアリー石サークルという可愛らしい（？）名もあるが、みんなマツタケ石と呼ぶ。

ネーミングセンスはともかく、どれだけ貴重で高価かは分かってもらえたと思う。

市場では一個一万イェンで流通している。

「だから報酬高かったんだ」

場所も人里はなれた森の中、力押しできないのでモンスターとも相性が悪い。なのにあたしがこのクエストを引き受けたのは、報酬が破格だったからだ。

なぜだろうと引っかかっていたが、それなら納得だ。

大切な臨時収入を消費して出て来る幽霊なんて、元仲間でも困る。

夕方、仕事から戻ってきた森林官たちにも話をきいた。

亡くなった新人くんは、他人思いのいい奴だったらしい。思い出し、ついでに感極(かんきわ)まった森林官たちは、男泣きに泣いていた。

「おれが悪かったんだあああっ。おれがあの時先に行っていなければ！」

「お前のせいじゃない。オレも悪かった！　あの日弁当を忘れて取りに戻らなければっ」

「ああっ、それなのに俺たちはまたあいつを殺してしまうのか！」

……クエストの演出とはいえ、暑苦しいＮＰＣたちである。こいつらも小人にしてくれればマシだったのに。

君たち分かってるかなあ？

その新人くんの幽霊を殺すのは、あたしとコウキなんだよ？

にっこり笑ってやれば、森林官たちはざざっと部屋の隅に逃げた。

何がそんなに怖いんだか。

あ、おネエのジジイだからか。

ひとのやる気を減らした森林官たちには、以前と同じように倉庫を見張ってもらう事にした。

夜、彼らはちびちび酒を飲みながら、複数ある倉庫の前に手分けして陣取った。

「中には入らないんだ」

「ええ。煙月斎(えんげつさい)様が、同じようにとおっしゃったので。あの時はまだ怖くて、こうして窓から覗(のぞ)くだけでしたの」

小人の娘さんは、あたし達と一緒に中間地点にいる。

後ろにはきれいな川、空には満月。

森林官たちも、まったり月見酒としゃれこんでいる。

気持ちは分かる。ビルだらけの空しか知らないあたしも、最高の景色だと思える。

しかし残念ながら、クエストの最中なのだ。

川と月ではなく、倉庫を見張っていなければならない。倉庫の後ろの森は暗く深く、幽霊くらいいくらでも湧いて出そうだ。

「なあトモ」

「なに」

「なんでオレ達クエストなんてしてんだ？　現実に帰る方法、探すのが先だろ」

コウキが珍しくまともな意見を出した。

ハーフエルフ補正でも入って、脳ミソから筋肉が落ちたのかもしれない。

小人の娘さんは、礼儀正しく聞かないでいてくれている。
クエストに関係ない話だと、冷たい目を向けたりもしない。
だから、あたしは倉庫を見ながら呟いた。

「……だって、みんな普通にゲームの続きやってるみたいなんだもん」

トリップしたのは、真夏の昼、しかもご飯時である。時間帯が悪くてログインしているのは百人程度だった（なにせマイナーだからね）。

だが百人いれば、あたしより上のプレーヤーだっているはずだ。
レベルだけじゃなく、判断力や洞察力に優れた人がいると思う（ｉｎｔ値の呪いを受けてないことを祈る）。
そんな人たちが何も言わないなら、あたしが騒いだってどうしようもない。

「たぶん、すぐに帰れるような状況じゃないのよ。原因不明で、誰も、どうしたらいいのか分からない。下手に騒いで絶望をあおるより、こうして気を紛らわしてた方がいいでしょ」

原因究明は、最前線で苦悩している主人公クラスの人がやると決まっている。
あたしみたいなその他大勢は、日々の生活を続けるしかない。

「お前、よく平気でそんな事言えるな。怖くないのか」
「煙月斎は泣かないからね」
「そっか。昨日のうちに泣いてふっ切ったのか。ならいいけどさ、

次泣きたくなったらオレに言えよ。ええと、……つまり……ひとりで我慢す」

照れくさげに鼻の横をかく男。

あたしは無言で居合抜きを披露(ひろう)した。

8月25日　2（後書き）

時間経過について。
朝　試しでモンスター退治　→昼　転職&掲示板チェックでクエスト引き受け　→午後三時頃　森に到着　となっています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4084y/

テンプレならテンプレらしくいけばいいのに、なぜこうなる

2011年11月21日22時47分発行